

# バンコクにおける格差と不平等

—ジェンダーの視点から—

マリー ケオマノータム

## はじめに

本稿は、ジェンダーの視点から近年のバンコクにおける格差と不平等の実態を明らかにするものである。以下、まずタイの工業化・都市化とバンコク一極集中の実態をふまえつつ、新中間層とインフォーマル・セクターの拡大による階層構造の再編を明らかにし(1)、ついでタイにおける家族とジェンダーの基本的な状況を把握する(2)。これらを前提に、バンコクにおける格差と不平等について、まずジェンダーの枠組みで明らかにし(3)、ついで女性問題の階層的なバイアスという視点からアプローチしていきたい(4)。

## 1. 階層構造の再編と女性労働

タイの工業化は、1960年代の輸入代替型産業の育成から、70年代以降の輸出志向型産業への転換を経て、80年代半ば以降の海外資本の直接投資ブームによって、大きく進展した。1960年と2000年を比べると、産業別就業人口の構成比は、第一次産業が82.4%から56.3%へ大きく減少し、第二次産業は4.1%から12.6%へ、第三次産業は13.5%から31.1%へとそれぞれ拡大した(表1)。

こうした工業化は、首都バンコクの急激な膨張と新中間層の成長をもたらした。バンコクの都市化は1970年代以降、本格化した。バンコクの人口は、1960年の213.6万人から、80年には471.1万人へと20年間で倍増し、1990年には554.7万人となったが、その後、人口の伸びは鈍化している(表2)。

表1 タイの産業別就業人口構成

(単位:千人、%)

年次	就業者数	第1次産業	第2次産業	うち製造業	第3次産業
1960年	13,749	82.4	4.1	3.4	13.5
1970年	16,652	79.3	5.7	4.1	15.0
1980年	23,281	72.2	7.5	5.6	20.3
1990年	30,844	63.9	13.5	10.2	22.6
2000年	33,779,155	18,265,260	4,096,944	3,041,987	10,107,807
2000年	32,470	56.3	12.6	9.4	31.1

注:不明、分類不能を除いて集計

出所:1990年までは Ministry of Labour and Social Welfare, *Year Book of Labour Statistics*  
2000年は National Statistical Office[NSO], *Population and housing Census*

表2 タイ・バンコクの人口の推移

(単位:人、人/km<sup>2</sup>、%)

年次	全国			バンコク		
	人口	人口密度	人口増加率	人口	人口密度	人口増加率
1960年	26,257,916	51.0		2,136,435	1,361.9	
1970年	34,397,374	66.8	31.0	3,077,361	1,961.7	44.0
1980年	44,278,000	86.0	28.7	4,711,000	3,003.1	53.1
1990年	56,303,273	109.4	27.2	5,546,937	3,535.9	17.7
2000年	61,878,746	120.2	9.9	5,680,380	3,621.0	2.4
2003年	63,079,765	122.5	1.9	5,844,607	3,725.7	2.9

出所:バンコク都政策企画局『バンコク』『バンコクの統計』

2003年の職業別の就業構造をみると(表3)、バンコクでは、専門・技術職が15.1%、管理職が12.4%、事務職が8.9%となっており、これら三者をいわゆる新中間層とみなすならば、これが36.4%を占めるにいたっている。同年のタイ全国の実業構造は、専門・技術職7.3%、管理職が7.0%、事務職が3.5%、合計17.8%にとどまることから、タイの新中間層がバンコクに偏在していることがわかる。またバンコクにおいては、1980年には、専門・技術職7.5%、管理職6.6%、事務職が9.1%、合計23.2%であったことから、近年の新中間層の拡大は、おもに専門・技術職と管理職の増大によるも

のであることがわかる(表4)。2002年の平均世帯月収をみると、バンコク圏は全国平均の約2倍となっている(表5)。また、2003年の労働力人口の学歴構造をみると、バンコクでは、高等教育の卒業者が28.6%を占めており、全国平均の12.4%を大きく上回っている(表6)。

このようにバンコクでは新中間層のかなりの蓄積がみられるようになっているが、それはバンコク内部での階層構造の再編をもたらしている。バンコクの被雇用者の職業別所得階層をみると、月収15,001バーツ以上の層が管理・専門技術の48.2%を占めるのに対して、事務16.6%、サービス4.

表3 職業別就業構成の推移

	(単位: %, 千人)			
	全国		バンコク	
	1980年	2003年	1980年	2003年
専門・技術	3.0	7.3	7.5	15.1
管理	1.9	7.0	6.6	12.4
事務	1.7	3.5	9.1	8.9
販売	6.9	13.4	20.9	20.1
サービス等従事者	2.9	13.2	11.7	13.4
運輸・通信	1.6	18.8	6.6	28.7
生産	9.6	36.8	31.5	
農林漁業	72.0		6.1	1.0
その他	0.4	0.1	0.0	0.4
就業者数	23,140.2	34,564.8	2,380.8	4482.6

注: タイでは2001年よりILO国際標準職業分類を採用したため、両年のカテゴリは厳密には一致しない

出所: 1980年はNSO, *Population and housing Census*

2003年はNSO, *Report of The Labor Force Survey*

表4 バンコクの職業別就業構成

	(単位: %, 千人)									就業者数
	専門・技術	管理	事務	販売	サービス	運輸	生産	農林漁業	その他	
1960年	4.4	1.5	9.1	20.0	12.2	5.2	25.9	18.7	3.0	802
1970年	6.2	7.7	8.6	18.5	14.6	4.9	28.5	10.2	0.8	1,139
1980年	7.5	6.6	9.1	20.9	11.7	6.6	31.5	6.1	0.0	2,381
1990年	13.9	6.3	11.4	19.5	10.1	6.1	29.0	2.6	1.0	2,967
2000年	16.2	8.1	9.4	20.6	12.4	8.5	23.7	1.0	0.1	4,063
2003年	15.1	12.4	8.9	20.1	13.4		28.7	1.0	0.4	4,483

出所: 1990年まではNSO, *Population and housing Census*

2000年、2003年はNSO, *Report of The Labor Force Survey*

表5 平均世帯月収の地域間比較

	(単位: バーツ)					
	1990年		1996年		2002年	
	平均世帯月収	指数	平均世帯月収	指数	平均世帯月収	指数
バンコク圏	11,724	208	21,947	204	28,239	206
中部	5,827	104	10,907	101	14,128	103
北部	4,719	84	8,331	77	9,530	69
東北部	3,529	63	7,388	69	9,279	68
南部	5,153	92	9,846	91	12,487	91
全国	5,625	100	10,779	100	13,736	100

注: 1.バンコク圏にはバンコク都およびノンタブリー、プラトゥムタニー、サムットプラカーンの各県を含む

2.中部にはバンコク都およびノンタブリー、プラトゥムタニー、サムットプラカーンの各県を含まない

3.指数は全国平均を100として算出

出所: NSO, *Report of The Household Socio-Economic Survey*

6%、技能・生産2.7%にすぎず、農林漁業では0%である(表7)。同様に、職業別にもっとも割合の大きい所得階層をあげるならば、管理・専門技術の10,001-15,000万バーツに対して、事務7,501-10,000バーツ、サービス5,501-6,500バーツ、技能・生産4,501-5,500バーツ、農林漁業3,501-4,500バーツと格差が目立っている。また職業別の平均世帯収入をみても、同様のことが確認できる(表8)。

その一方で、公式統計としては現れにくい、インフォーマル・セクターの拡大も顕著である。

インフォーマル・セクターとは、「規制が少なく、小規模で、新規参入が容易で、比較的単純な技術を使用し、正規教育を必要とせず、資本もそれほど必要ではない活動」(パスク1993:4)であり、多くは家族経営として営まれている。具体的には、「露天商、女中、タクシー運転手、検察作業員などの雑業的サービス部門のほかフォーマル・セクターである近代的な工場や企業の臨時工や季節工、雑役のような不安定な賃金労働」(松蘭1989:279)などがこれにあたる。表9は、セクター別に就業

表6 労働力人口の地域別学歴構造(2003年)

(単位: %、千人)

	全国	バンコク	中部	北部	東北部	南部
無教育	3.4	1.4	2.6	8.0	1.4	5.1
初等教育未満	37.1	19.4	35.3	43.1	42.3	36.2
初等教育	22.4	18.6	19.7	18.4	28.6	21.5
中等教育前期	13.8	15.6	15.7	12.6	12.2	14.0
中等教育後期	10.7	15.4	12.8	8.6	8.3	11.3
高等教育	12.4	28.6	13.5	9.2	7.2	11.6
その他	0.0	0.1	0.0	0.1	0.0	0.0
不明	0.3	1.0	0.5	0.0	0.0	0.3
N	34,564.8	4,482.6	8,128.5	6,346.4	11,169.6	4,437.6

出所: NSO, Report of The Labor Force Survey

表7 バンコクの被雇用者の職業別所得階層(2003年)

(単位: %、千人)

	管理・専門技術	事務	サービス	技能・生産	農林漁業	その他、不明	合計
1,500B以下	0.3	0.0	1.5	0.4	0.0	0.5	0.5
1,501-2,500B	0.2	0.0	2.1	1.3	0.0	2.3	1.1
2,501-3,500B	0.2	0.3	6.3	3.2	14.3	10.0	3.5
3,501-4,500B	1.2	5.6	17.0	21.9	52.9	32.7	15.7
4,501-5,500B	1.9	9.6	17.7	22.8	22.9	26.2	15.6
5,501-6,500B	2.8	14.0	18.8	16.3	0.0	10.3	11.9
6,501-7,500B	4.5	12.1	9.4	8.5	0.0	5.2	7.5
7,501-10,000B	17.1	22.7	15.4	16.4	10.0	6.8	15.7
10,001-15,000B	20.0	18.1	6.4	5.9	0.0	3.1	10.7
15,001-20,000B	15.6	9.3	2.5	1.5	0.0	0.8	6.1
20,001-30,000B	16.8	5.2	1.8	0.7	0.0	0.2	5.5
30,001B以上	15.8	2.1	0.3	0.5	0.0	0.3	4.6
不明	3.8	1.0	0.7	0.5	0.0	1.4	1.6
合計	794.0	373.5	400.1	1,019.4	14.0	456.4	3,057.4

出所: NSO, Report of The Labor Force Survey

表8 バンコク圏の家族と平均世帯収入

(単位: %、人、バーツ)

年次	項目	農業経営		自営		被雇用者					無職	合計
		土地所有	借地	商工自営	事務的自営	管理・専門技術	農業	一般労働者	事務・販売サービス	生産		
1996	構成比	1.1	0.6	20.7	0.5	11.3	0.9	2.3	32.3	23.0	7.3	100.0
	平均世帯人員	4.3	4.4	3.8	4.2	3.6	3.9	2.6	3.1	2.7	2.6	3.2
	平均月収	16,021	16,127	29,135	36,173	44,925	7,558	8,779	18,185	12,241	19,537	21,947
2002	構成比	0.5	0.2	25.3		19.0	0.6	0.8	27.2	17.3	9.1	100.0
	平均世帯人員	4.3	4.3	3.8		3.7	3.6	3.2	3.2	2.8	2.5	3.3
	平均月収	18,780	13,514	30,183		52,550	9,620	11,412	20,520	14,182	25,540	28,239

注: タイでは2001年よりILO国際標準職業分類を採用したため、両年のカテゴリーは厳密には一致しない

出所: NSO, Report of The Household Socio-Economic Survey

者の構成を示したものであるが、これによるとバンコクにおいては29.2%がインフォーマル・セクターで働いていることになった<sup>1)</sup>。

では、こうしたバンコクの状況をふまえたうえで、女性の問題を考えていくことにしたい。まず、図1により、女性労働力率を年齢階層別にみると、全国、バンコクともほぼ完全な台形であり、日本でみられるようないわゆるM字型曲線にはなっていないことがわかる。つまり、タイの女性は、一般に出産や育児のために仕事をやめたり、中断したりすることはないのである。家事や育児は、おもに家族や親族のサポートに支えられているといえることができる。女性の問題をみる前提として、まずタイにおける家族とジェンダーのあり方について考えてみたい。

## 2. タイ社会における家族とジェンダー

タイを含む東南アジアは、いわゆる「双系制」の社会とみなされており、家族は「家族圏」として存在している（坪内・前田 1977、北原・高井 1989）。双系制とは、個人の系譜が父系・母系の両方からたどれ、父系・母系の両方の親族と同じような権利義務関係をもつ社会である。

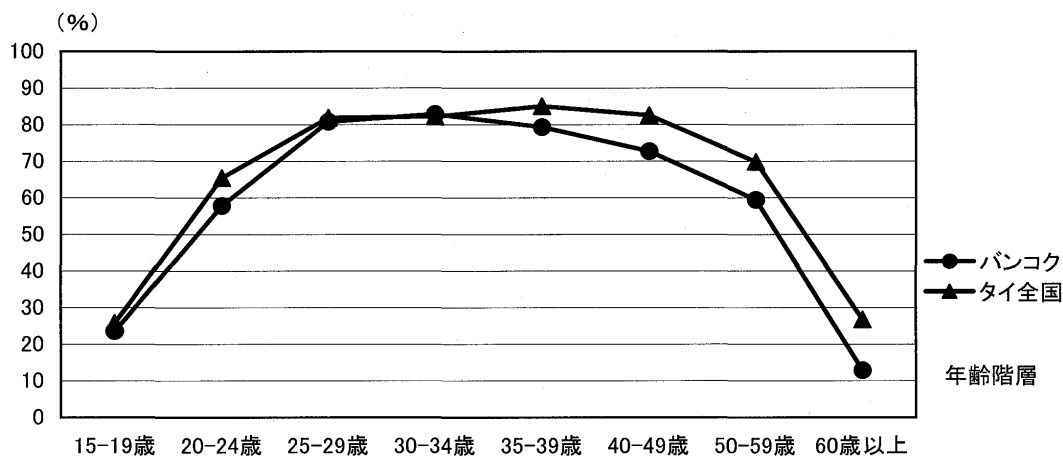
家族についていえば、基本的に夫婦と未婚の子どもからなる世帯を構成する点で、「核家族」「近代家族」に似ているが、その現実的な集団性は低く、家族の関係は二者関係の累積として捉えられる（橋本 2004：210）。家族圏的な家族においては、家族圏内のメンバーが状況に応じて自由に同居することになる。夫婦は結婚後もそれぞれの親の家族圏から切り離されることがないので、祖父母と孫の隔世代同居も特別なことではない。こうした「家族圏」社会では、子どもが祖父母や近親によって育てられることもよくあることである。また、伝統的なタイ社会では結婚後に妻方に居住する慣行もあり（竹内 1989:229-231）、妻が自分の親族からのサポートを容易に受けることができる。また一般に男女平等の均分相続が行われている（竹内 1989：231）ことから、女性の地位は概して高く、家事・育児をめぐる性別役割分業意識も比較的希薄であるといえよう。

こうしたタイ社会の伝統はもちろん農村を基盤に形作られてきたものであるが、近年の急激な社会変化を前提としてもなお、現代のタイ社会の文化的基層をなしていると考えられる。したがって今日のバンコクにおいて、女性労働力率

表9 セクター別の労働力人口（2005年）

	全国		バンコク	
	就業者数	構成比	就業者数	構成比
フォーマルセクター	13765.9	37.9	2744.6	70.8
インフォーマルセクター	22536.5	62.1	1131.1	29.2
合計	36302.4	100.0	3875.7	100.0

出所：National Statistical Office[NSO] HP



出所：NSO, Report of The Labor Force Survey

図1 年齢階層別にみた女性労働力率（2003年）

が年齢を問わず非常に高いのは、こうした家族文化とジェンダー意識が背景にあるからだと考えることができよう（橋本 2004：211、斧出 2004：224-227）。

しかし、今日のタイ社会において近代的な意味での男女平等が実現されているということができないのもまた事実である。ではつぎに、タイにおける男女格差の実態とバンコクの女性問題についてみていくことにしよう。

### 3. 男女格差と不平等

タイにおいては、1933年に普通選挙が実現し、法的には男女平等の政治的権利が確立した。しかし、現在も国会議員に占める女性の割合は4%ほ

どにすぎず、地方行政や地方議会でも同様に圧倒的な男性優位となっている。また公務員についても、数では女性が上回っているが、行政職階が上位になるほど女性の割合は小さくなっていく。教育機会においても、女性の場合、初等教育ないしはそれ未満のレベルにとどめおかれる割合が大きくなっている（表10）。ちなみに2005年5月に「世界経済フォーラム」が発表した「男女格差指数」の世界ランキングでは、タイは58か国中44位であった<sup>2)</sup>。この指数は、「女性の経済参加」「雇用の均等」「政治的決定権」「教育の均等」「医療健康」という5つの指標をもとに算出されたものであるが、このうち「女性の経済参加」ではタイは世界で第1位との評価がなされている。ではその実態

表10 性別にみた学歴構成（2003年）

	(単位：%、千人)			
	全国		バンコク	
	男性	女性	男性	女性
無教育	3.3	7.0	1.5	4.3
初等教育未満	33.6	37.7	17.7	22.7
初等教育	21.6	18.6	16.1	14.8
中等教育前期	18.3	15.3	19.8	16.7
中等教育後期	12.7	10.6	20.0	17.2
高等教育	10.2	10.5	23.7	23.4
その他、不明	0.3	0.3	1.2	1.0
合計(実数)	24056.1	24517.4	3134.4	3526.1

出所：NSO, Report of The Labor Force Survey

表11 性別にみた職業構成（2003年）

	(単位：%、千人)			
	全国		バンコク	
	男性	女性	男性	女性
専門・技術	6.4	8.4	14.0	16.3
管理	9.2	4.2	17.0	7.4
事務	2.3	4.9	5.5	12.6
販売	8.7	19.1	14.4	26.4
サービス	12.5	14.1	10.3	16.8
生産	22.7	14.0	37.4	19.2
農林漁業	38.3	35.1	1.1	0.8
その他	0.0	0.1	0.2	0.5
就業者数	19,071.3	15,493.5	2,349.9	2132.6

出所：NSO, Report of The Labor Force Survey

表12 性別にみた職業と雇用形態（全国：1998年）

	(単位：%)											
	雇用主		公務員		民間雇用者		自営業		無給労働者		合計	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
専門	1.0	0.3	29.4	60.1	5.6	8.7	0.4	0.4	0.1	0.1	4.5	7.0
管理	54.5	50.3	10.5	5.4	2.2	0.8	0.0	0.1	0	0	3.6	1.2
事務	0.0	0.0	10.2	20.0	7.1	12.5	0.0	0.1	0.2	0.4	3.0	5.1
販売	0.9	2.4	0.2	0.2	4.8	7.1	13.9	40.3	11.3	15.2	9.1	16.7
サービス	0.1	0.0	24.3	8.1	4.8	12.4	1.2	4.8	0.4	0.6	4.2	5.3
運輸	0.0	0.0	9.7	1.9	9.7	0.5	6.3	0.5	0.4	0.2	6.2	0.5
技能	0.7	0.5	12.3	2.5	46.5	39.0	5.3	9.4	2.9	2.7	17.0	14.1
農業	42.8	46.5	3.4	1.7	19.3	18.9	72.9	44.4	84.7	80.8	52.4	50.1
その他	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.1	0.0	0.0	0	0	0.0	0.0
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

出所：NSO, Report of the Labor Force Survey

表13 性別にみた被雇用者の所得階層構成（2003年）

	(単位：%)	
	男性	女性
3,000B以下	55.2	61.7
3,001-6,000B	25.5	24.2
6,001-9,000B	8.4	5.6
9,001-20,000B	8.0	6.5
20,001B以上	2.9	2.0

出所：NSO, Report of The Household Socio-Economic Survey

はどうであろうか。

表11は性別にみた職業構成であるが、女性の割合が相対的に大きいのは、専門・技術職、事務職、販売職、サービス職である。また表12をみると、公務員の場合、専門職、事務職の割合が大きいことがわかるが、ここでの専門職の多くを占めるのは学校教員である。公務員の賃金は決して高くはないが、社会的な威信と雇用の安定性があり、女性に人気のある職業となっている。タイでは、前述した均等相続のもとで、男性は動産、女性は不動産を相続する慣行があり、女性はいわばストックを手に入れることになる。そこでフローとしての賃金ではなく、威信と安定を選択することには、一定の合理性があるといえよう。表13には、性別の所得階層を示したが、賃金面でも男女の格差があることがわかる。ではつぎに、女性をめぐる問題状況を階層ごとにみていくことにしよう。

4. 女性問題の階層的表出

かつてのバンコクの階層構造は、特権層としてのごく少数の上層、小規模経営の少数の旧中間層、そして圧倒的多数の下層というシンプルなものであったが、工業化・都市化の進展とともに、階層

の分化と再編が進み、その構造は複雑になってきた(松蘭1998)。

現在のバンコクの階層構造をあくまで仮説的に示したのが表14である。これは職業と所得を中心に、学歴や住宅などの要素も加え、さらに筆者の地域調査の経験や実感も加味して、ひとつのモデルとしてカテゴリー化したものである。以下これを参照しながら、女性問題の階層ごとの表出について考えてみたい。

まず「上」は、王侯貴族、高級官僚・軍人、大企業経営者などごく限られた特権層である。ここでの「女性問題」については、本稿の文脈からはとくに言及する必要はないだろう。

「中の上」にランクするのは、新中間層のうちの専門・技術職、経営・管理職など上層ホワイトカラーである。代表的なイメージをあげるならば、バンコクまたは都市部の出身で夫婦ともに大学卒である。この層の一部では、専業主婦化の傾向がみられるとの指摘がある(橋本 2004:213-215)。地方出身者はもちろんバンコク出身者においても、狭小過密の都心部を離れ郊外での居住が中心になりつつあり、かつてほど育児に対する家族・親族のサポートを期待できない状況が出ている。しか

表14 バンコクの階層構造と女性問題

階層	上	中の上	中の中	中の下	下の上	下の中	下の下
構成比 (%)		20	10	20	20	20	10
月収 (バーツ)		50,000	30,000	20,000	10,000	5,000	5,000未満
職業階層	特権層 (高級官僚・軍人) 企業経営者	上層ホワイトカラー (専門・技術、経営・管理)	旧中間層 (自営、経営者)	下層ホワイトカラー (事務職)、労働者 (販売、サービス、運輸、生産)	インフォーマル・セクター (雑業、零細自営)	インフォーマル・セクター (雑業、零細自営、日雇)	インフォーマル・セクター (不安定賃金労働者、性風俗)
学歴	大学・大学院	大学	特定できず	中等教育	中等教育前期	初等教育	なし
家族	大家族	核家族 (大家族、親族近居もあり)	大家族	核家族 (親族近居もあり)	核家族 (親族・同郷ネットワークもあり)		単身 (出稼子女)
出身	バンコク	バンコク、地方都市	バンコク (華僑に多い)	バンコク近郊農村、下層第二世代からの	第一世代は農村、第二世代はバンコク		農村
住宅	邸宅	一戸建	一戸建、店舗兼用住宅	タウンハウス、郊外チュムチョン	市街地チュムチョン、公団住宅	公認スラム	非公認スラム
コミュニティ				カナカマカーン・チュムチョン (地域委員会)、貯金会、婦人会			
女性問題		専業主婦化 (育児・教育)、育児支援、雇用機会 (理系技術者) の縮小		中高年層の雇用確保 (職業訓練・市場の確保: 婦人会)、若年層の育児支援	中高年層の雇用確保 (職業訓練・市場の確保: 婦人会)、若年層の育児支援、労働保護法の範囲外	中高年層の雇用確保 (職業訓練・市場開拓: 婦人会)、貧困 (売春、エイズ、麻薬)、福祉 (医療、住宅、育児)、二重労働、労働保護法の範囲外	貧困 (売春、エイズ、麻薬)、福祉 (医療、住宅)、労働保護法の範囲外

出所: 筆者作成

し、公的な育児支援はまったくの未整備である。また高学歴層では、子どもの教育に対する期待も一般に大きく、将来のためにもきちんと子どもに「手をかけたい」という意識が高まっている。こうして育児責任がもっぱら母親にあるという近代的な意味でのジェンダー意識とは別の次元で、いわば消極的な選択として専業主婦になる大卒女性がいる<sup>3)</sup>。なお将来的にタイでは資本・技術集約型産業への転換が進み、理系技術者の雇用機会が増えると予想できるが、大学での理系の専攻は男性に大きく偏っており、大卒女性の雇用機会の拡大という点では先行きにやや不安があるといえよう。

「中の中」は、自営や小規模経営の旧中間層であり、バンコク出身の華僑2世、3世がその代表的なイメージとなろう。この層では家族や個人の状況によるヴァリエーションの幅が大きく、階層的な「女性問題」を特定することは困難である。

「中の下」には、事務職などの下層ホワイトカラーと労働者が位置する。バンコク近郊農村からの移入とバンコク出身の下層第二世代からの上昇移動がおもな供給源である。タウンハウスなどの新興住宅地やインフラ整備が十分に行われていない郊外地域に多く住んでいる。家計を維持するうえで共働きが必要だが、学歴をもたない中高年女性にはそもそも十分な雇用の機会が用意されていない。また若年層の場合、家族や親族が近くにいないケースが多く、たとえいたとしても、親世代自身が家計維持のために仕事におわれ、子育て支援をする余裕がないケースが一般的になっている。したがって、この層の中高年女性には雇用機会の創出<sup>4)</sup>、若年女性には子育て支援という社会的なケアが必要となっている。

下層では、仕事の多くがインフォーマル・セクターとなる。「下の上」には、市街地の密集住宅やスラムからの住み替えとなる公団住宅に住む世帯、「下の中」には、組織化されたスラムに住む世帯がそれぞれ位置しよう。農村からの移入者の多くは「下の上」ないし「下の中」として定着し、すでにそこから第二世代が育っている。

なお、これら「中の下」「下の上」「下の中」の居住地域には、多くの場合、地域住民組織であるカナカマカーン・チュムチョンが組織されてい

る<sup>5)</sup>。またカナカマカーン・チュムチョンを母体に、住民による金銭的な互助組織である「貯金会」や職業訓練と市場開拓のためのグループである「婦人会」などが組織されており、地域改善や経済的安定、雇用創出に対する取り組みが行われている。なおスラムでは、貧困問題も深刻であり、売春やエイズ、麻薬の問題に悩まされている地域も少なくない。失業状態の男性のなかには賭事や飲酒にふけるものもあり、多くの女性たちが家族を支えるために、仕事と家事の過酷な二重労働を強いられている。

「下の下」、最底辺には、農村からの単身の出稼ぎ者が位置する。女性の場合、農村から身売りされ、性風俗や売春に従事するものも多く、借金漬けや人身売買などの無法にさらされている。バンコクの底辺には、いまだ貧困、住宅、人権などあらゆる面での基本的福祉に恵まれていない女性が多い。

#### むすびにかえて

以上みてきたように、バンコクの女性をめぐる格差と不平等は、階層的なヴァリエーションが広がり、多様かつ複雑になっている。しかし、本稿をとじるにあたって、多くの女性たちが属する階層とその居住地域では、カナカマカーン・チュムチョンに代表される住民の組織化が進み、地域的・経済的な「自助」と「参加」に向けた取り組みが始まっていることに注目しておきたい。格差と不平等の是正にとって政府やNGOの果たす役割は重要だが、住民自らが行動することの意味はそれらにまして大きいといえよう。そして、女性が活動の担い手になっている地域も少なくない。もちろん住民による地域活動の多くはいまだ試行錯誤の段階にあり、とりわけ経済的な面では多くの困難に直面していることも事実である。しかし、住民の組織化とその主体的な行動のうちにこそ、格差と不平等を乗り越えるエンパワーメントの可能性があると思われる。

#### 【注】

- 1) なおここでの国家統計局のデータは、社会的な保障や保護の適応の有無を基準とし、フォーマル・セクターとインフォーマル・セクター

を分類したものである。インフォーマル・セクターの統計的な把握には困難がともなうため、多くの研究者や国際機関がそれぞれ独自の推計値を発表している。それらによれば、バンコクにおけるインフォーマル・セクターの割合は、40%から60%ほどとみなされている（遠藤 2003:66）。

- 2) 上位5ヵ国は、スウェーデン、ノルウェー、アイスランド、デンマーク、フィンランドであり、北ヨーロッパ諸国が独占している。ちなみに日本は38位であった。
- 3) 橋本泰子は、こうした状況規定的な選択の結果として、「働く意志はあるが、なんらかの理由で育児期に離職を決意したケース」（橋本2004:213）を「消極型主婦」と呼び、自主的・主体的な選択の結果である「積極型主婦」と区別したうえで、その出現の要因を保育制度の立ち後れに求めている。
- 4) 行政による地域社会開発政策の一環としての地域における女性の雇用創出の試みと女性の地域活動の実態については、藤井（2004）を参照。
- 5) カナカマカーン・チュムチョンを中心とする住民の自治的な地域活動については、牧田・マリー（1997）、マリー・牧田（1998a, 1998b, 2005）、マリー（1998, 2000）、マリー・牧田・藤井（2000=2003）を参照。

### 【文献】

- 遠藤環,2003,「タイにおける都市貧困政策とインフォーマルセクター論：二元論を超えて」アジア政経学会『アジア研究』第49巻第2号, pp.64-85
- 藤井和佐,2004,「バンコク都中間層居住地域の女性たち——村一品運動と都主婦グループ」, 宮坂靖子（研究代表）『アジア諸社会におけるジェンダーの比較研究——日本・韓国・中国・タイ・シンガポールを対象に』科学研究費補助金報告書,pp.230-240
- 船津鶴代・籠谷和弘,2002,「タイの中間層——都市学歴エリートの生成と社会意識」,服部民夫・船津鶴代・鳥居高編『アジア中間層の生成と特質』アジア経済研究所,pp.201-234
- 橋本泰子,2004,「タイ都市中間層における家族文化の持続と変容」, 宮坂靖子（研究代表）『アジア諸社会におけるジェンダーの比較研究——日本・韓国・中国・タイ・シンガポールを対象に』科学研究費補助金報告書,pp.208-217
- 北原淳・高井康弘,1989,「東南アジアの家族・親族」北原淳編『東南アジアの社会学——家族・農村・都市』世界思想社, pp.15-30
- 牧田実・マリー ケオマノータム,1997,「バンコク中心部の地域住民組織——カナカマカーン・チュムチョン・ソーイ・ソーダの事例」『名古屋大学社会学論集』第18号,pp.15-32
- マリー ケオマノータム・牧田実,1998a,「バンコク郊外部の地域住民組織——カナカマカーン・チュムチョン・ペッサヤームの事例」『宇都宮大学国際学部研究論集』第5号,pp.1-15
- マリー ケオマノータム・牧田実,1998b,「バンコクにおける地域社会開発政策の展開と地域住民組織」中田実・板倉達文・黒田由彦編著『地域共同管理の現在』東信堂,pp.232-245
- マリー ケオマノータム,1998,「バンコクにおける地域住民組織と新中間層——新興住宅地のカナカマカーン・チュムチョン」『宇都宮大学国際学部研究論集』第6号,pp.27-39
- マリー ケオマノータム（訳）,1998,「タイ」中田実編『住民自治組織の比較研究 資料集』（平成7~8年度科学研究費補助金（国際学術研究）研究成果報告書）,pp.6-30
- マリー ケオマノータム,2000,「タイにおける構造変動と地域運動」古屋野正伍・北川隆吉・加納弘勝編『アジア社会の構造変動と新中間層の形成』こうち書房,pp.148-166
- マリー ケオマノータム・牧田実・藤井和佐, 2000,「タイ」中田実編『世界の住民組織——アジアと欧米の国際比較』自治体研究社,pp.33-57 (=Malee Kaewmanotham, MAKITA Minoru and FUJII Wasa , 2003, "Community-Based Organization in Urban Thailand: Community Development and the Khana Kammakan Chumchon", NAKATA Minoru ed., *Building Local Autonomy:*



*A Sociological Study of Community-based Organization among 11 countries*, Tokyo: Jichitai-Kenkyusya Publishing, pp.52-79.)

- マリー ケオマノータム・牧田実,2005,「バンコクのスラムにおける地域住民組織——カナカマカーン・チュムチョン・ワット・ユアングロンランパックの事例」『宇都宮大学国際学部研究論集』第20号, pp.1-13
- 松菌祐子,1989,「タイの都市化・都市社会」北原淳編『東南アジアの社会学——家族・農村・都市』世界思想社,pp.270-293
- ,1998,「就業構造と住民生活」田坂敏雄編『アジアの大都市1 バンコク』日本評論社,pp.191-209
- 斧出節子,2004,「バンコク都中間層の家族における家事・育児の実態と価値・規範」, 宮坂靖子(研究代表)『アジア諸社会におけるジェンダーの比較研究——日本・韓国・中国・タイ・シンガポールを対象に』科学研究費補助金報告書,pp.218-229
- パスク ポンパイチット,1993,「タイにおける都市インフォーマル・セクター:概観」パスク・糸賀滋,1993,『タイの経済発展とインフォーマル・セクター』アジア経済研究所, pp.3-33
- 竹内隆夫,1989,「タイの家族・親族」北原淳編『東南アジアの社会学——家族・農村・都市』世界思想社, pp.148-166
- 坪内良博・前田成文,1977,『核家族再考』弘文堂

#### 【付記】

本稿は、国際シンポジウム「女性からみたアジア・メガシティの不平等と格差」(東北大学大学院文学研究科21世紀COEプログラム・社会階層と不平等研究教育拠点主催、2005年12月17日、仙台国際センター)のパネリスト報告「女性からみたタイ・バンコクの格差と不平等」をもとに、加筆・修正したものである。

## **Difference and Inequality in Bangkok: From a Gender-based Perspective**

In this paper, we will attempt to clarify the current state of difference and inequality in Bangkok in recent years from a genderbased perspective. First, we will look at the reorganization of social stratification that have resulted from the expansion of the new middle class and the "informal sector" while taking into account the industrialization and urbanization of Thailand and the unipolar concentration in Bangkok. We will also attempt to gain a clearer understanding of the basic conditions in Thailand in relation to family and gender. Using this information as a starting point, we will clarify gender frameworks as they relate to difference and inequality in Bangkok, and approach these issues from the perspective of social stratification in the context of women problems.

(2006年5月31日受理)